



薄墨の櫻 うすすみ さくら

昭和五十年四月二十日 発行

昭和五十一年六月十日 二刷

著者 宇野千代 うのちよ

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

182 東京都新宿區矢來町七十一

電話 〇三(二六六)五一二 業務部

〇三(二六六)五四二 編集部

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式會社

製本所 神田・加藤製本

定價 二〇〇〇圓

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

薄墨の櫻

裝幀・插畫

三井永一

その一

私が薄墨の櫻を觀に行きたいと思つたのは、さして風流な氣持があつたからではありません。

しかし、或る人から、その櫻のことを聞いた當座は、闇雲に行つて見たいと思つたものでした。「さうだな、幹の回りが三丈八尺、枝の擴がりが約二反歩だと言ふんだから、美事なものだよ。」と、その人は言つてから、「それがね、一ぺん枯れさうになつたのを、櫻の若木の根を、何百本も根繼ぎしたんだよ。面白いぢやアないか。」と言ひました。いつでも、人の話を勝手に粉飾して、自分の想像したもの、さもそれ

が眼の前にあるもののやうに思つて了ふ癖のある私は、その櫻の、二反歩も枝を擴げて咲いてゐるさまが、眼に見えるやうな氣がしたのです。それに、これは内證の話ですが、樹齡千二百年と言ふ老樹に、若木の根を何百本も繼いで蘇生させたと言ふ話は、老人の私には興味のあることだつたのです。

今年の春、たうとう私は暇を見つけて、その櫻を觀に出かけました。助手の山口雪子と一緒にした。雪子のことは、助手と言つてみたり、祕書と言つてみたり、うちの重役と言つてみたり、ときに依つて違つた紹介をするのが、私の習慣でした。「をかしいわね。どこにも、薄墨の櫻のポスターがないわ。」新幹線で羽島驛に着いたときから、それが不思議でした。車で岐阜驛へ廻つてみても同じことでした。ちよつとした祠があつても、仰々しく宣傳ポスターを貼つて、觀光客を誘致するのが、この頃のことですから、樹齡千二百年などと唱^{うた}ひ、萬朶と咲いた櫻の花の色刷り寫眞を掲げるくらゐのことは、あるのが當然では

ないでせうか。

岐阜驛で車を乗り替へて山へかかりました。前もつて問ひ合せてあつたので、四月の九日か十日が見頃だと分つてゐたのです。これも私のをかした性癖なのですが、いま、薄墨の櫻を見に、根尾までの深い山道にさしかかつたのだと思ひますと、何と言ふのですか、もつと早く、もつと傍まで駆け寄つて見たいやうな、或る焦躁に驅られるのでした。

美濃の山や谷や林や民家の風景は、繪で見た鐵齋の山水に似てゐます。いかにも、山の奥へ這入つて行く感じなのですが、しかし、畑も山も民家も枯れた風景ではなく、たつぷりと肥えた感じを受けたのは、季節が春のせるかも分りません。

一體に、かう言ふ風流な目的で旅に出たことのない私は、何だか、鐵齋の點景人物になるのが、似合はしくないやうな氣になります。「薄墨の櫻を見に行くのだけれど、住吉屋つて言ふ、その宿屋から近いと

ころにあるのか知ら、」と私は運轉手に聞きました。「さア、薄墨の櫻つて、聞いたことがありますなア、」と言ひます。きつと、ついこの頃、他縣からこの土地へ働きに來た人なのだな、と思つて聞いてみますと、もう三四年も、岐阜市内で仕事をしてゐるのだと言ひます。「ぢやア、櫻を見に行くお客を、根尾まで案内すると云ふことはないの、」「ありませんア、」と言ふのです。しかし、考へやうによつては、こんなに山の奥深く、櫻の花が咲いてゐても、運轉手が知らないと言ふのは、いかにもありさうなことに思はれました。

車で四十分。根尾村は山の奥の寒村と、東京郊外の外れにある町とが、一緒くたになつたやうな印象をうけます。表に百姓道具を出したままの藁葺き屋根の家と、罐詰や雑誌や玩具を列べてゐるペンキ塗りの店などが、軒を列べてゐるのです。その町の中ほどに、私たちの宿がありました。ただ客が泊ると言ふだけの宿で、何の飾りもないのですが、廣い土間や庭の泉水のあとなどに、古くからある宿らしい氣配

が残つてゐます。

座敷の中に、電熱の置炬燵が置いてありましたが、それだけでは體が溫まりさうもないほど、寒かつたのです。日がもう暮れさうで、それに生憎なことに、小雨が降り出しましたが、私の癖で、それでも今日の中に、ちよつと櫻を見ておきたいと思ひました。「すぐそこに見えますよ。橋のところまでいらつしやると、」と言ふのです。住吉屋と大きく書いた番傘をさしかけてくれました。田舎訛のちつともない、サラリーマンの奥さんみたいな、色の白い、ちよつときれいなお内儀さんでした。

宿から廣い往還を小半町ほど行つて、左手に折れますと、根尾川にかかります。いまだき、どうしてこんな朽ちかかつた橋があるのでせう。橋桁の崩れたのが上から見えるやうな危つかしい橋を渡つて、ごろた道の狭い村道を上つて行きますと、「あれですよ。あの谷あひの、大きな白壁の家の傍に咲いてゐるでせう。」と、通りがかりの人が教へ

てくれました。日暮れで、それに雨のせるで、確かに大きな白壁の家ははつきりと見えますが、その傍に咲いてゐると言ふ、肝腎の櫻の花は、バックの白壁の中にとけ込んで、ぼうと霞んで見えるだけなのです。

あれがあつた、私のはるばると尋ねて來た「薄墨の櫻」なのでせうか。雨の中の雲煙の彼方に、確かに櫻の花らしい白い固まりは見えました。が、それは東京で見た青山墓地の並木の櫻や、外濠とぎぼりの丘の上の櫻のやうな、あんな艶麗な感じとは全く違ひます。

私は勝手の違ふものを感じて、幾分がっかりしましたが、或ひは雨の中の、而もこんな遠見では、見當が外れるかも知れません。「でも、あそこまで、この下駄ばきでは無理ぢやないでせうか。ここでさへ、こんな泥んこの道ですもの、」と雪子が言ひます。それに、見上げる谷あひは、いまにも日が暮れさうなので、心を残しながら、宿へ引返すことにしました。

晩飯にやまめの串ざしそのまま焼いたのが出ました。さつき、土間でそれを焼いてゐるのを見ましたが、眼鏡をかけた、背の高い、いかにも料理人らしくない男だと思つたのですけれど、給仕に出たをばさんの話だと、ここの主人で、岐阜の高校の教師なのに、夕方、やまめを焼くときにだけ、手傳ひをすると云ふ話でした。鹽の加減がよくて、旨く焼けてゐました。

やまめは根尾川で釣れます。さういふ釣りの客が、ここへ泊りに來るのです。しかし、櫻を見に來る客はめつたにないと言ふことです。一昨日、東京の世田谷から、やはり私にこの櫻の話をした同じ人から聞いたと言つて、女客が一人、來ただけだと言ふことです。或ひはさうかも知れません。こんな山奥の寒村まで櫻を見に來ると言ふのは、あんまり酔狂なことかも知れません。

「でも、圖案だけは何とかしなくてはね、丹青會には間に合せると言つて、もう約束したんだから、」と私は言ひました。丹青會と言ふのは、

私の重要な得意さきの一つであるデパートの伊勢丹が、豪華な都内のホテルを借切つて催すのが慣例の、大がかりなきものの發表會のことなのです。「ですけど、」と言ひかけて雪子は、ふと、その煤けた壁にかけてある一枚の、色紙の繪を見つけました。「先生、これ、何でせう、」
「荒川豐藏とサインがしてあるわ。おや、薄墨の櫻の、幹と枝だけの繪だわ。幹と枝だけで花はないけど、雪子ちゃん、ちよつと、ここへ、畫箋紙を擴げて、」と雪子に指圖して、その荒川豐藏の繪を摸寫させました。ここへ釣りにでも來て、花のない頃の櫻を描いたものと思はれます。

きもののデザインと言つても、私にとつては、謂はば面白半分に、氣紛れにやつてゐたのでしたが、いまでは、それが仕事になりました。格別、繪が描ける譯ではなくて、ただ、色と形と空間の配置を考へるくらゐのことなのですが、それでも、何とか、きものになつて行くのです。「さう、右の後身から斜めに大きく幹をとつて、肩と袖に枝を擴



げるのね。花はあとからつけて行くわ。」私の癖で、それからあとは、勝手に描いたイメージによつて、これではなくてはならない、と言ふ、或る一つの雰圍氣が生れて來るのです。「幹も枝も花も、全部、薄墨で仕上げて行くのよ。好いものになるかも知れないわ。」私はもう、七分通り出來たのも同じだと思つて、雪子と肩を列べて、とにかく眠りました。固い木綿の蒲團の感觸は、肩から風が抜けるやうに寒かつたのですが、それも、久方振りに故郷の家を思ひ出すやうな、不思議に安らかな氣持でした。

その二

翌日も雨は止みませんでした。ちやうど日曜日なので、宿の主人が案内してくれると言ふのです。木綿の縞と派手な緋のモンペを借り、

ゴム長の靴を借りて、雪子も一緒に宿を出ました。

一緒に歩いてみると、宿の主人は吃驚するほど、背の高い人でした。「この村では、薄墨の櫻で客を呼びたい、と言ふ氣持はないのでせうか、」と、また同じことを聞きますと、「現状では、櫻どころではない、と言ふところですよ。ご覧になつてもお分りのことと思ひますが、ここは先年の大地震で、山崩れや何かで、その跡始末の土木事業が、まだ手つかずでゐるところもあるのですから、」と言ひます。さう言へば、村の橋や崖だけでなく、宿の裏庭の石燈籠や築地なども、崩れたままだつたのです。

今日は、昨日とは違つた道を行きました。橋を渡らずに、反對に、村外れのごろた道を右に折れて、田畑の間の草深い小道を上ります。こんな道を、觀光客が上る筈がありません。道端に、三四本のひよろひよろとした稚い櫻の木が花をつけてゐるほかに、何の風情もない道なのです。二三町も上つたのでせうか。遠くから見たときは、それ

ほどとも思はなかつた白壁の家が、その谷あひを壓するやうに、堂々と聳え立つてゐるのに、先づ、吃驚しないではゐられませんでした。そこから少し離れたところにある、何を祭つたのか分らない小さな神社の傍に、背後の白壁の家の堅固なたたずまひとは凡そ反對に、いまにも崩れ落ちさうな石垣があつて、その下に、その櫻の木があつたのです。「あつ、」と聲をのむ感じは、花がきれいだからではありません。

周圍の柵もまばらに落ちて、枝を支へてゐる添木も不揃ひで、幹圍三丈八尺、枝の擴がり約二反歩と言ふ巨木が、老殘の身を支へてゐる姿は、無慙とも思はれたからでした。大きな枝はただ殘骸だけになり、その腐つた先から、ひよひよと新しい枝が出て、か細い花が咲いてゐます。その枝の分れ目の、大きく裂けたところはちよつとした空き地くらゐの廣さがあつて、そこに黄楊の木の群生してゐるさまは、一そう痛ましく、老殘の木の枯死する寸前と言ふ感じをうけます。雨に濡れて、花はしつぽりとすぽんでゐますので、晴れたら或ひはもつと

妖しい感じがしたのかも知れませんが、一體に蕾は小さく、もう散り際なのでせうか、その名の通り、仄かに薄墨色に見えるのです。

これでは、人がわざわざ見に来ないのも道理だと、私は思ひました。周囲の山も畑も、この櫻の美しさを包んでゐると言ふ感じではなく、「もう枯れますよ、」と言ふ感じを露出してゐるのです。見ると、すぐ傍に、これも風雨に晒されて、字もはつきりとは讀みとれないのですが、この櫻の縁起を書いた建て札が立つてゐます。

それによりますと、この櫻は、昔この山奥に隠棲中の繼體天皇が、都から迎への人に連れられて里を離れるとき、ここにお手植ゑされたものらしいのです。そのときの御製と言ふ歌が書いてあるのですが、はつきりとは讀めません。その歌の中に、僅かの間ここに住んでゐたと言ふ意味なのでせう、「薄住みよ。」と言ふ言葉があつて、それが、この櫻の名のなつたのだと書いてあります。

かう言ふ古い話は、あとから作られたものかも知れませんが、しかし、